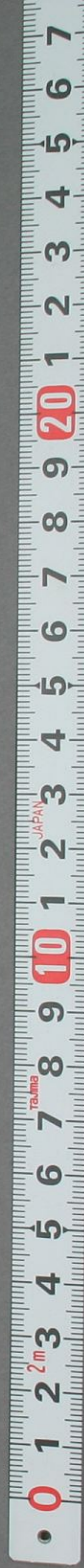


参考保元物語

二下

伊勢  
1747  
6



リ 5



爲義降參事

鎌倉本無。京師杉原半井本各有異。并載於段尾。

去程ニ六條判官并子共尋進ラス

ニ仰附ラル。十六日清盛三百餘騎ニテ。如意山ヲ

越テ。三井寺ヲ求レトモナシ。東坂本ニ在由聞ヘ

テ。大和莊泉。过ト云所ヲ追捕ス。是ハ無動寺領ナ

レハ。大衆起テ。寺領ヲ追捕スル條無念也。仔細ア

ラハ。山門ニ相觸テコソ沙汰ヲ致サヌ。左右ナク

亂入ノ條狼藉也。トテ。軍勢ニ向テ散々ニ相戰ス。

官軍神威ニ恐テ引退間。大衆勝ニ乘テ。清盛カ郎

等兩三人搦捕。又大津東浦ヲ燒拂フ。是ハ山門領  
タル上。昨日爲義ヲ舟ニテ東近江へ著タリトテ。  
シテケレトモ。跡形ナキ虛說也ケリ。爲義ハ直河  
ト云所ヨリ。木工神主カ許ニ隱居タリケルカ。官  
軍向テト聞テ。三河三郎大夫近末河下。岡崎本有  
尻字。本文恐脱  
ト云者ノ家ニ行テ。ソレヨリ東國へ下ラントシ  
ケルカ。運ヤ盡タリケン。忽ニ重病ヲ受テ。心身苦  
痛セラレケレハ。氏神ハ幡大菩薩ニモ離サレ給  
ヒケリトテ。郎等共モ落失テ。纔ニ子共ノ外。十八

人許分ソ殘ケル。免用シテ馬ニ痛ハリ乘テ。箕浦ノ  
方へ行テ。船ニ乘ラントスル處ニ。誰トハ知ス。兵  
三十騎許追來リ討ントシケレハ。賴賢以下身命  
ヲ捨テ防戰。追散シテケリ。其時殘兵モ行方知ス  
成ニケリ。ソレヨリ彌イタ賴ス少ニ成果テ。心細キノミ  
ナラス。判官ハ重病ニ煩給フ。其上海道モ塞リ。關  
關モ堅ク守ルト聞ヘケレハ。中々東國へ下ラン  
事モ叶ヒ難シトテ。又三郎大夫カ家ニ立歸テ。日  
暮シカハ山上ニ上リ。其夜ハ中堂ニ通夜シテ。殊

ニ重病矢除ノ悲願ヲ憑テ。終夜祈請セラレタリ。  
明レハ十七日。西塔ノ北谷黒谷ト云所ニ。二十五  
三昧行フ所ニ行テ出家ヲ遂。法名義法房トソツ  
カレケル。月輪房堅者ノ許ヨリ。墨染ノ衣袈裟ヲ  
奉リテ。沙彌ノ形ニ成給フ。

○岡崎本云。此爲義ト申ハ。八幡太郎義家ノ四男  
トハイヘトモ。實ニハ對馬守義親ノ四男トシ  
テ。義家ニハ孫ナリ。父義親滅亡ノ後。孤ト成ノ  
間。祖父義家はヲ養育ス。爰ニ義家四男河内守

義忠ヲ以。源氏ノ家督ニ定ル時。此爲義ヲ嫡子  
ニ備フヘキノ由。命ニ置ノ所ニ。義忠不慮ニ滅  
亡スルノ間。則爲義ヲ養子トシテ。直ニ當流ノ  
一跡ヲ讓與ヘテ。家督ヲ相續セシメ。嫡々ノ所  
帶文書兵具等。盡ク以テ受畢。云云。按此說與系譜符合。  
此爲義ハ十四歳ニテ。叔父美濃前司義綱。其子美  
濃三郎義明ヲ討テ。此云討義明非也。義明及義綱事。見于第一卷新院召。爲義段。  
其時ノ勸賞ニ。左兵衛尉ニナサレケリ。元ハ陸奥  
四郎トソ申ケル。十八歳永久元年四月。清水寺別

當ノ事ニ就テ。南都ノ太皇朝家ヲ恨奉リテ。國民

ヲ催シ。春日ノ神木ヲ先トシテ。栗栖山岡崎本云。

テテ來タリシヲ。馳向テ追返シキ。永久元年南都大衆入洛既出

第一卷新院召。其勸賞ニ左衛門尉ニナル。為義段可并見。

歲ニテ檢非違使五位尉ニナル。為義任官京師衫原半并本有異同。

可并見。今日來中御門中納言家成卿ニ附テ。陸奥

守ヲ望申ケルニ。祖父伊豫入道頼義。此受領ニ任

シテ。貞任宗任カ亂ニ依テ。前九年ノ合戰有キ。八幡太郎義家。又彼國守ニ成テ。武衛清原武家衛備

武貞子少攻ルトテ。後三年ノ兵亂有キ。按奥州後三年記家衛等

作亂。永保中。也。寬治五年十一月武衛家衛亡。百練

鈔云。寬治元年十二月二十六日。陸奥守義家言。上

斬賊徒武衛之由。然ハ猶意趣殘ル國ナレハ。今為

義陸奥守ニ成タラマシカハ。定テ基衛藤清ヲ亡

サント云志有ヘキカ。旁不吉ノ例也トテ。御聽子レ

レナカリシカハ。為義。然ラハ自餘ノ國守ニ任シ

テ何カハセントテ。今年六十三マテ。按前云十四

云。義綱事在天仁二年。又云永久元年十八歲。然則

至保元元年當六十一。前後自齟齬半并本同本書。可并終ニ受領モセサリケル。日來ヨリ地下ノ檢見。

非違使ニテ在ケルカ。由ナキ新院ノ御謀反ニ與  
シ奉リ。年來ノ本望ヲモ達セスニテ出家入道ニ  
テケルコソ無念ナレ。義法房子共ニ向テ宣ケルハ。  
我身カ合期シタラハコソ。各引具ニテ山林ニモ  
立隱レメ。我ハ只義朝ヲ憑テ。都へ出ニト思フ也。  
サテモ今度ノ勲功ニ申替テモ。命計ハ助コソセ  
ニスラヌ。但恣ニ院方ノ大將軍ヲ承タレハ。敎命  
重クシテ助リ難カラニカ。ソレ又カチキ事也。齡  
既ニ七旬ニ及。惜へキ身ニ非ヌ。萬一甲斐ナキ命

助リタラハ。如何モシテ汝等ヲモ助タヘシ。面ハ  
先如何ナラン木ノ陰岩ノ間ニモ隱居テ。事鎮ラ  
ン程ヲ待ヘシト宣ヘハ。爲朝聞モ敢ヌ。此義然ル  
ヘカラス候。縦下野守殿ユソ親子ノ間ナレハ。助  
申サントシ給フトモ。天氣ヨモ御免候ハシ。其故  
ハ。新院ハ正シク主上ノ御兄ニテ渡ラセ給ハヌ  
ヤ。左府亦關白殿ノ御弟ソカシ。豈親トテ罪科ナ  
カラシヤ。義朝イカニ申サルハトモ。立難クコソ  
覺侍レ。御所勞ナラリオハシメサハ。只何共ニテ

關東ニ赴。今度ノ合戰ニ上リ合ヌ三浦介義明。平  
繼カ子 畠山莊司重能。平重小山田別當有重。重能等ヲ  
相カタラヒテ。東八箇國ヲ管領シテ。暫モオハシ  
マスヘシ。若京都ヨリ討手下ラハ。為朝一方承テ。  
思儘ニ合戰シテ。叶ハスハ其時打死スヘシ。ナト  
カ暫支サラント申ケレハ。ソレモ東國へ下著テ  
ノ事ソカシ。落人ト成ヌレハ。何事モ思フニ叶ハ  
ヌ物ナレハ。降參セント宣テ。既ニ山ヨリ出給ヘ  
ハ。子共泣ケ供シツ。西坂本下松ヲ下シカハ。傳

目漸ク明行テ。鳥ノ聲ケ告渡。峯ノ横雲晴ケレハ。  
入道疾ケ何方ヘモ落行ヘシト宣テ。都人方ヘ赴  
給フヲ。暫御待候ヘ。申ヘキ事候ト聲ケニ申セハ。  
何事ニヤトテ立歸給ヘハ。前後左右ニ立圍テ。泣  
ヨリ外ノ事ヲナキ。誠ニ只今ヲ限ニテ。又逢ヘキ  
事ナラチハ。餘波ヲ惜ムモ理也。入道今度者ノ頭  
ニ疵ヲ戴テ。合戰ヲ致ス事。全ク我身ノ榮花ヲ期  
スルニアラス。若打勝テ運ヲ開カハ。汝等ヲ世ニ  
アラセント思フ為也。今義朝ヲ頼テ出ルモ我若

安穩ナラハ。其蔭ニテ各ヲモ助ハヤト思フ故也。  
 汝等ヲ捨テ。我一人助ラントヤ思フラン。齡ヨシ既致  
 仕ニ餘レハ。為義歲與前又身ノ後榮ヲカ期セシ。  
 如何ナラン所ニモ深ク隱テ待ヘシ。疾ヤトテ下  
 ラレケルカ。角テ心強クハ宣シカトモ。サスカ餘  
 波リヤ惜カリケシ。又立歸テ。頼賢ヨ頼仲ヨ云ヘキ  
 事有歸レト宣ヘハ。各呼レテ立歸ル。誠ニハ異ナ  
 ル事ナケレトモ。アカ又別ノ悲ニサニ。又呼下シ  
 給ヒケル。恩愛ノ程ユワ哀ナレ。如此互ニ別ヲ莫ト

ヘトモ。サテ有ヘキニモアヲサレハ。面々ハ散々  
 ニコソ別レ行。此下。作者述父子離入道ハ賀茂河  
 ヲ渡リ。糺タス森ヨリ雜色花澤ヲ義朝ノ許ヘ遣シテ  
 是ニテ遁ク來レル由ヲ申サレケレハ。左馬頭夜ニ  
 入テ輿ヲ奉リ。竊ニ判官殿ヲ迎取給ヒケリ。  
 ○京師本杉原本半井本竝云。為義東坂本ニ隱居  
 ル由聞ヘシカハ。半井本。為義上有十六日。清盛  
 ニ急キ尋追寄スヘキ由仰ラル。則五百餘騎ヲ  
 率シ。志賀磨崎ヲ經テ。東坂本ニ發向シ。在々所

新編源氏物語 卷三

四



所ヲ搜<sup>サ</sup>ス程ニ。半井本云。十七日清盛ヲ指遣サ

ト申ケレハ。近所ノ在家ヲ追捕ス。大和莊泉

衆起テ。云云。此下半井本。又註于下。ノ迂ト云所ハ。無動寺ノ領ナルヲ追捕シケル

間。大和以下。京師山塔ノ大衆起テ。大ニ憤テ云。

縱<sup>ヨ</sup>朝敵楯籠ルト云トモ。衆徒ニ觸テコソ尋ヘ

キ所ニ。我意ニ任テ亂入スル條甚イハレナシ。

且ハ先規ナシ。且ハ狼藉也。京師本云。速ニ追返

全クト一同ニ僉議シテ。散クニ是ヲ防ケリ。清盛全ク私ノ所行ニ非ス。敕命ニ依テ罷向フ由

返答シケレ共。縱<sup>タ</sup>敕定ト云共。爭力先例ナキ事

ヲ致サルヘキイハレナシトテ。半井本云。大衆

古ヨリ追捕ノ例ナキ所也。又ハ社司ニモ觸ス。

山門ニモ訴ス。押テノ沙汰ハイハレナシトテ

射ケレハ。清盛恐テ引退。郎等二人。半井本搦捕。

清盛大衆ニ向テ合戦スルニ及ハス。面目ヲ失

テ引返シケルトテ。大津西浦ノ在家ヲ焼拂フ。

是ハ在地ノ土民等。昨日判官ヲ船ニ乗テ。箕浦

半井本へ送タリト聞ヘケルニ依テ也。サレ共

其コト僻事ニテ有ケル。爲義ハ搜<sup>サ</sup>ス所ニハ

ナクシテ。三川尻五郎大夫景俊カ許ニ隱居テ。  
 同十六日五十餘騎ニテ。三井寺ヲ經テ。東國へ  
 上赴ケルカ。天ノ譴ヲヤ蒙ケン。箕浦ニテ  
半井本不  
 名<sup>日地</sup>重病ヲ受テ。萬事限トツ見ヘニケル。  
半井本云  
 温病トソ聞ヘシ。鬼角シテ相助リ落行程ニ。官  
 馬ニ昇乘テ云云。軍出來テ討  
 軍大勢ニテ追來ル由聞ヘケレハ。  
半井本云  
 留ニトスル上。大將軍ノ重  
 病ナルヲ見テ。郎等共云云。郎等共皆落失テ。子  
 共六人郎等三四人。  
半井本無三字。而  
 云云。而ヲ殘リケ  
 ル。半井本云。近江箕浦ニテ船ニ乘ラントシケ  
 ル所ニ。兵二十騎許懸出タリ。戰フニ及ハス

逃散。四人ノ郎。如何モシテ東近江へ渡ラント  
 等モ落失云云。如何モシテ東近江へ渡ラント  
 シケレトモ。不破關塞リタル由申ケル間。子息  
 達ヲハ思ケニ成ヘシトテ。我身ハ又引返シ。東  
 坂本五郎大夫カ許ニ兩三日アリケル。  
半井本  
 返シ。箕浦ヨリ東坂本ニ歸。黒  
 谷邊ニ忍居ケルカ。雜色云云。雜色花澤カ勸ニ  
 依テ。比叡山ニ登リ。其夜ハ中堂ニ通夜シテ。殊  
 ニ衆病悉除ノ悲願ヲ頼ミ。祈請ヲワセラレケ  
 ル。明レハ西塔ノ北谷。黒谷ト云所ニ行。  
自此其夜  
 師半井本竝無。京師本云。東  
 塔南谷ノ或房ニ立入。云云。月輪房堅者ノ評ニ

立入テ。墨染ノ姿ト成。昔ハ伊豫京師本有播磨

伊豫下陸奥守ヲコソ望シニ。義法房トソ申ケ

ル。十四歳ノ時。義綱ヲ生捕シ勸賞ニ。左衛門尉

ニ成。十八ニテ粟子山ヨリ奈良法師ヲ追返シ夕

リシ勲功ニ。半井本二十檢非違使ニ補シテヨリ

以來。何國ヲモ賜ヘカリシヲ。先祖ノ任國也トテ。

陸奥ヲ所望セシカハ。汝カ祖父頼義。其國ノ守

護ノ時。九箇年ノ合戰アリキ。九箇年。京師本半

父義家任國ノ時ハ。後三年ノ軍アリシカハ。為

義ニ於テハ不吉也。半井本云。意趣殘ル國也。為

トテ。トテ御許容ナカリシカハ。判官陸奥ノ外

ハ賜テモ何カハセントテ。六十二餘ルマテ半井

本云六十三トテ。云云。按地下檢非違使ニテ有

與前齣。齣。説註于本書。事ハスル。常ニハユキカケシ。解官セラレ

ケリ。剩サ為朝力鎮西ノ狼藉ニ依テ解官セラレ

テ。前檢非違使ニテソアリケル。此。下至歌。其夜

ハ堅者ノ房ニ。二十五三昧ヲ行ヒケルヲ聽聞

シケルカ。自其夜至此。京師本無。而云。法師御前

ノ過去帳ニ我法名ヲ自筆ニ書入。其下ニ一首ノ歌ヲソ書附ケル。

梓弓ハツルヘシトモ思ハ子ハナキ人數ニ兼テイルカナ

去程ニ此以下半井六人ノ子共此彼ニ在ケル

カ。父ノ行エノユカシサニ山へ尋登リ替給へ

ル色ヲ見各袂ヲシホリケリ。其中ニ為朝申ケ

ルハ。君ノ御運ノ盡ヌルニヒカレテ加様ニ御

成候事力及ハサル次第也。然トイヘトモ。世間

ノ習必一様ナラス。御心弱ク思召ヘカラヌ。尤

メハ浮フ理アリ。サテモ此儘果ヘキニ非ス。我

等兄弟ノ者共數多候ヘハ。運ヲ天ニ任セ。時ノ

至ラシヲ御待。頼母ニク思召候ヘ。入道殿ハ萬

事ニ附テ穩使ヲ存セラレ。御心ヲ卑下シテ振

舞給ヘハ。今一テ思出一ツモ一シテサス。易キ

受領ヲタニモ聽サレ給ハヌソカシ。我等五六

人ハ。皆一方ノ大將軍ヲ承ルヘキ器量ノ者共

ト呼レシカハ。ヲメクト今更降參スヘキニ非

ス。又出家遁世シテ乞食沙門ノ身ト成ヘキニ

テモナシ。サテイツヲ限ニ隱居候ヘキ。所詮為  
朝カ計ヒニ御附候ヘカシ。是コリ急東國ヘ御  
下向有テ。今度ノ合戰ニ參シ候ハ又三浦介義  
明。畠山重能。小山田有重ナトヲ召寄テ仰合テ  
レ。坂東ニ城郭ヲ構ヘ。足柄<sup>アシカ</sup>管根<sup>カネ</sup>ヲ指塞。四郎左  
衛門尉殿ヲハ奥州ヘ下シ。子ニシユノ關ヲ基  
衡ニ固サセ。掃部助殿ヲハ海道ノ固ニ指置。六  
郎殿ニハ甲斐ノ人々ヲ指添。山道ヲ指塞キ。七  
郎殿ト九郎トヲハ。信濃國ノ人々ニ相添。北陸

道ヲ指塞テ守護サセ申ヘシ。為朝ハ入道殿ニ  
附添。東八箇國ノ家人ヲ催シ。守護シ申サシニ。  
西國ノ勢何十萬騎寄來トモ。何程ノ事カ候ヘ  
キ。然ラハ鎌倉ニ都ヲ建。入道殿ヲハ法親王ト  
仰キ奉<sup>カ</sup>川。八箇國ノ家人等ノ中ニ。然ルヘキ侍  
共ヲハ。太政大臣。左右大臣。大中納言ニナシ。若  
者共ヲハ宰相三位四位五位殿上人ニナシ。黨  
ノ者共ヲハ受領檢非違使ニトシ置。為朝鎌倉  
ノ御後見ニテアラヌルハ。昔承平ニ將門カ

下總國相馬郡ニ都ヲ建タテ平親王ト號シテ百官  
 ヲ家人ニ行ヒシニ。何カハ今モ劣オトルヘキ。只下  
 ラセ給ヘトソ申ケル。半井本云。六人ノ子共山ヘ  
 尋上リ。為朝父ニ申ケルハ。  
 サテシモ山ニヲハスヘキ事カ。坂東ヘ下ラセ  
 給ヘカシ。今度ノ軍ニ上リアハ又。義明。重能。有  
 重等ヲ。太政大臣。左右大臣。内大臣ニモナシ。是  
 等カ子共ヲ大納言。宰相。三位。四位。五位ノ殿上  
 人ニナシ置。將門カ様ニ我身ヲ親王ト號シ。基  
 衡語ヒ子スノ開ヲ固サセ。與大將軍ニハ。四郎  
 左衛門ヲ下シ。海道ヲハ掃部權助ニ固サセ。山  
 道ヲハ七郎ニ固サセ。坂東ノ御後見為朝シテ。  
 世中ナトカ過サ。入道宣ケルハ。若ク盛ナリ  
 ルヘキト申云云。伊豫陸奥守ニ夕ニモ十  
 時。最安ク成ヘカリシ。

ヲスシテ。衰老ノ今出家入道シテ後ソレ程ノ  
 果報アルヘシト覺ス。今度新院ノ御謀反ニ與  
 シテ。カク道狹キ身ト成シモ。殿原ヲ世ニアラ  
 セント思ヒツル故ノカシ。和殿原ハ若者共ナ  
 レハ。兔モ角モ振舞給ヘ。申旨一往其理有テ。嬉  
 シクハ存スレ共。申旨以下。京師本無。入道ハ義朝ヲ頼テ  
 降參セント思也。其故ハ半井本云。出家ノ後ノ  
 果報有ヘシトモ覺ス。  
 如何シテ病モ直リ命ヲモ助ルヘシト思フニ。  
 一日モ忍フヘシトモ覺ス。我身合期シタラハ  
 コソ。子共引具シテ東國ヘモ赴山。清盛播磨守  
 野ニモ籠ラメ。サレハ清盛云云。

ニ成タニナルカ。叔父忠正父子五人申助ケタ  
 リト聞義朝ハ左馬頭ニ成タニナレハ勲功ニ  
 モ申カヘテ。父カ命ヲハナトカ助サルヘキ。我  
 タニモ助リナハ。和殿原助又事ハヨモアラシ  
 ト思ヘハ。我タニ云云。半井本無。只我ハ出ント思フハ如  
 何ト宣ヘハ。八郎是ヲ聞色ヲ失テ音モセス。其  
 外ノ子共ハ。半井本云。殘ノ子共同詞ニ申ケル  
 ハ。引具ニ進ラセテハ。彌我等道狭  
 クナリ。思フ様ニモフルニハテ。御身モ我身モ  
 遁ルヘシトモ覺サリツルニ。御身ノ為モサル  
 事ニテ。我等ヲモ助サセ給フヘキ。御支度ニテ  
 コソ候ヘト。各悅申ケル。花澤ヲ使者トシテ。

云。加様ニ附添奉ルモ。我等カ身ノ上ヲハサテ  
 置ヌ。只御事ノ心苦シサヲコソ存候ヘ。免モ角  
 モ御身ノ助ラセ給ハンコソヨカラヌ。只御心  
 ニコソト申ケレハ。花澤ヲ使者トシテ。我身重  
 病ヲ受テ出家入道ス。急キ迎ニ與給ルヘシト  
 テ遣シケリ。サテ入道ハ。半井本云。サヨ  
 スケ方云云。西坂ヘ  
 トテ下ケルカ。子共相續テツ行ケル。大嶽ノ下  
 水飲ノ邊。半井本云。水ノ御ニテ宣ケルハ。京師  
 本云。今ハ迎モ近クアラシ。各ハ何方ヘモ落行ヘシ  
 云云。半井本云。今ハ迎ノ者近ツクラン。和殿原

ハ歸レトテ又ナクイマタ身ノ上ヲタニ知サ  
 く今度ノ合戰云云。レ共和殿原ヲモ申助テ見ニソトテ誠ニ名殘  
 階ケニテ頻ニ涙ヲツ流ケル子共モ又父ヲ中  
 ニ立籠テ手ヲ取組袖ヲ互ニヒカヘテ只泣ヨ  
 リ外ノ事ヲナキ入道又泣ケ今度ノ合戰ニ大  
 將軍ヲ承リシモ吾身ハ老ノ末ナレハ縦思出  
 アリ共如何許ノ榮花ヲ期スヘキ唯子共ノ行  
 エヲ思ヒツル故也又只今頸ヲ延恥ヲ捨テ出  
 ニトスルモ全ク我身ヲ思フニアラス和殿原

ノ爲ヲカシサレハ如何ナラニ谷ノ底岩木ノ  
 陰ニモ身ヲ隱シ入道カナラン様ヲコソ聞果  
 メ相構テ一所ニ落集ル事ナカレ縦和殿原カ  
 中ニ一人二人如何ナル事ニ逢トモ殘留ル者  
 共ナトカ本意ヲ遂サラニ此中ニ九郎ハイマ  
 タ十五カ六ニ成ト覺ユ誠ニ武略ノ道ヲモ知  
 ヘカラス旁是ヲ相具シテ旁京師本 作ハ郎何クニモ  
 隱シ置我形見トモ思ヒ又ハ子トモ思フヘシ  
 此下期再會下此世心安クナラハ義朝ニ云合  
 節京師本不載



必ス都ニテ再會ヲ遂ニスル也。サラハ暇トラ  
スル此相構云云至疾ケトアリシカ共。涙ニムセ  
ヒテ行ヤルヘシトモ見ヘス。人目ヲ憚ル身ナ  
レハ。各暇乞テ行別ル。今ヲ限ト思ヒケレハ。子  
共ハ立留リテ父ヲ見送。父ハ子共ヲ見返リテ。  
呼返シ給フ程ニ。互ニ各殘ヲ慕ヘトモ。サテシ  
モ有ヘキナラ子ハ。散ケニソ別レケル。此下至行  
師本子トモモ。同シ道ヘハ行ス。大原。志津原落行。京  
生里。鞍馬。奥。貴船。方サマヘ。思ケニ落行。サル無。

ニ花澤半井本有左馬頭ノ許ニ行テ。角ト申。義

朝大ニ悦。鎌田ヲ使者トシテ。力者共ニ輿舁セ。

急キ迎ニ遣サレタリ。半井本云。父ヲ迎取大下

松邊ニテ入道殿ニ行向。頓テ御輿ニ乗入。洛ス。

義朝躑躅テ對面申。悦ノ涙ヲ流ケル。サテ一間

ナル所ニ入。女房三人附申。様ケニイタハリ奉

ル云云。

謀反人被誅事

去程ニ平馬助忠正ハ。淨土谷ト云所ニテ。淨土谷

師杉原鎌倉半井本不載。京師杉原鎌倉本並云忠  
正伊勢國へ落夕リケルカ。死罪ヲ停ラル、由傳  
へ聞出家ニテ清。出家ニテ深夕隱テ有ケルカ。爲  
盛ヲ頼來ル云云。

義入道毛降參ニ夕リトヤ聞テケル。子共四人相

具ニテ。竊ニ姪ノ播磨守ヲ憑テソ來リケル。按京師杉

原錄倉半井本上段云、爲義聞忠正既降。亦來降。與此相齟齬未詳其先後。左衛門大夫

正弘京師杉原鎌倉半井本不載正弘以下各有異

可并考。其子石衛門大夫家弘。其子文章生安弘。

次男右兵衛尉頼弘。三男光弘。已上五人。藏人判官

義康彌捕テ。即大江山ニテ是ヲ斬。家弘弟大炊

度弘ヲハ。和泉左衛門尉信兼承テ。六條河原ニテ

切テケリ。

○京師本杉原本鎌倉本半井本並云。左衛門大夫

家弘。子息右衛門尉盛弘。石杉原本左衛門尉光弘

左衛門尉杉原本作石衛門尉鎌倉本作左衛門尉

左兵衛尉鎌倉本半井本光弘作頼弘文章生安弘

杉原本作恭弘。以上四人。義康大江山ニテ是ヲ

斬。大炊助度弘ヲハ。和泉判官信兼。六條河原ニ

テ斬。鎌倉本有家中宮侍長長弘。杉原本半井本

本前載光弘。蓋今誤矣。平判官實俊船岡山ニテ斬。此下鎌倉本無。

右衛門尉時弘右衛門京師本作左衛門半井本周防判官

季實承テ斬半井本云時弘ヲハ季實干レトテ是ヲ預ル云云按半井本鎌倉本為

義最期段載斬時弘見于下

平馬助忠正嫡子新院藏人長盛次男皇后宮侍長

忠綱三男左大臣勾當正綱四男平九郎通政政當作正

與前齣五人ヲハ清盛朝臣承テ申刻許ニ六條河

原ニテ是ヲ斬京師杉原鎌倉半井本無申平馬助

ヲハ其時ノ別當花山院中納言忠雅權中納言藤忠宗子ト

同名惡カリナントテ忠貞ト改名セラレテケル

京師杉原鎌倉半井本不載忠正改名此忠貞ト申ハ桓武天皇十一

代御末平將軍貞盛國香子六代孫讚岐守正盛力次

男也此人軍散ニテ後出家入道ニテ深ク隱テ有

ケルカ清盛ヲ憑テ行タラニニサリトモ命計ヲ

助ヌ事ハヨモアラシト思テ降參セラレタリケ

リ誠助ケント思ハハ左コソ有ヘキニ叔父姪内

々不快ナル上我忠正切タラハ定テ義朝ニ父ヲ

斬セララルヘシ縦宥恕ノ儀有トモ此旨ヲ以テ支

申サント腹黒ニ思ハレケルコソ恐シケレ京師杉原

本並云。信西ニ内々云合テ。清盛申請テ斬ケルトソ聞ヘシ。云云。

為義最期事

去程ニ為義法師カ頸ヲ刎ヘキ由左馬頭ニ宣下セラレケレハ。宥置ヘキ旨。ヤウクニ兩度マテ奏聞セラレケレトモ。主上逆鱗有テ清盛既叔父ヲ誅ス。何ソ緩怠セシメン。姪ナラシ子ノ如シト云ヘリ。叔父豈父ニ異ナランヤ。速ニ誅戮スヘシ。若猶違背セシメハ。清盛以下ノ武士ニ仰附ラルヘキ由。敕定重カリシカハ。カナク涙ヲ押ヘテ。鎌田次

郎ニ宣ケルハ。給言如此。是ニ依テ判官殿ヲ討奉ラハ。五逆罪ノ其一ヲ犯スヘシ。罪ニ恐テ宣旨ヲ背カハ。忽ニ違敕ノ者ト成ヌヘシ。如何スヘキト有シカハ。正清畏テ申ニ恐候ヘトモ愚ナルコトヲ御諚候者哉。私ノ合戦ニ討奉ラセ給ハシコソ。其罪モ候ハシスレ。其上觀經ニハ。劫初以來。父ヲ殺ス惡王一萬八千人也。トイヘ共。イマタ母ヲ殺ス者ナシト説レテ候ソレハ。諸ノ惡王。國位ヲ奪ハントテソ為ナリ。是ハ朝敵ト成給ヘハ。終ニハ

道ル間敷御身ナリ。縦御承テ候ハストモ。時日  
ヲ廻スヘキ御命ナラヌニトリテハ。御方ニ侍ラ  
セ給ヒナカラ。人手ニ懸テ御覽候ハンヨリ。同ハ  
御手ニ懸進ラセ給テ。後ノ御考養ヲコソ能クセ  
サセ給ハニスレ。何カ苦ニク候ヘキト申セハ。サ  
ラハ汝計ヘトテ。泣々内ヘ入給フ。即鎌田入道ノ  
方ニ參リ。當時都ニハ。平氏ノ輩上書權威ヲ執テ。頭殿  
ハ石ノ中ノ蛛蛛。按未詳為トヤランノ様ニテヲ  
何字之訛ハシマセハ。東國ヘ下ラセ給候也。判官殿ハ先々

テ奉ラントテ。御迎ニ進ラセラレテ候トテ。車差  
寄タレハ。サラハ今一度ハ幡ヘ參テ。御暇乞申ヘ  
カリシ物ヲトテ。南ノ方ヲ伏拜テ。懸テ車ニ乗給  
フ。七條朱雀ニ白木ノ輿ウツヲ昇居タリ。是ハ輿ヨリ  
乗移リ給ハン處ヲ。討奉ラン支度也。其時秦野次  
郎延景鎌田ニ向テ申ケルハ。御邊ノ計ヒ誤レリ。  
人ノ身ニハ。一期ノ終ヲ以テ一大事トセリ。ソレ  
ヲ暗ヤミト殺シ奉ラン事情アク侍リ。只有ノ儘ニ  
知セ奉リテ。最期ノ御念佛ヲモ勸申。又ハ仰置ル

へキ御事モナトカナカルへキト云一ハ。正清尤  
 然へシ物ヲ思ハセ進ラセシト存テ。加様ニ計ヒ  
 タレトモ。誠ニ我誤也ト申ケレハ。延景參テ。誠ニ  
 ハ關東御下向ニテハ候ハス。頭殿宣旨ヲ奉リテ。  
 正清太刀取ニテ失ヒ進ラスへキニテ候。再三歎  
 御申候シカ共。敕定重ク候間。カナク申附ラレ候。  
 心閑ニ御念佛候へシト申タリシカハ。口惜キ事  
 哉。為義程ノ者ヲ。夕ハカラストモ討セヨカシ。縱  
 綸言重クシテ。助ル事コソ叶ハス共。ナト有ノ儘

ニハ知セヌ。又誠ニ助ケント思ハ。我身ニ替  
 テモナトカ申宥サルへキ。義朝カ入道ヲ憑テ來  
 タランヲハ。為義カ命ニ替テモ助ケナシサレハ  
 諸佛念衆生。衆生不念佛。父母常念子。子不念父母。  
 ト説レタレハ。親ノ様ニ子ハ思ハ。又習ナレハ。義  
 朝一人カ罪ニ非ス。只恨シキハ此。事ヲ始ヨリト  
 ト知セヌソトテ。念佛百遍許唱ツ。更ニ命ヲ惜  
 ム氣色モナク。程經ハ定テ為義カ首斬ル見ント  
 テ。雜人ナトモ立込へシ。疾々キレト宣へハ。鎌田

次郎太刀ヲ拔テ後へ廻リケルカ。相傳ノ主ノ首  
斬ニ事心憂テ。淚ニ昏テ太刀ノ當所モ覺子ハ。持  
タル太刀ヲ人ニ與フ。其時。願諸同法者。臨終正念  
佛。見彌陀來迎。往生安樂國ト唱テ終ニ斬ラレ給  
ケリ。首實檢ノ後。義朝ニ賜テ。孝養スヘキ田仰下  
サレケレハ。正清是ヲ請取テ。圓覺寺ニ收墓ヲ建  
壇ヲ筑卒。都婆ナトヲ造立セラレテヤウクノ  
孝養ヲ致サレケル。此。為義ハ妾多カリケレ  
ハ。腹々ニ男女ノ子共四十二人ノ有ケル。異本云。四

十六人。按為義子。諸系圖所載。或熊野別當ノヨ  
男女二十餘人耳。共無所考。  
ニナシ。據東鑑及系圖一本。熊野別當行範。者為義  
衰記云。熊野別當。湛增者。賴朝外戚。姨。也。云云。盛  
衰記所載。蓋不知。湛增。妻。賴朝。母。之。姉。妹。也。又。按。劔  
卷。以。實。方。末。孫。熊。野。別。當。教。真。者。為。為。義。婿。而。其。子。湛  
增。云。云。諸。系。圖。無。教。真。者。以。湛。增。為。湛。快。子。印。本。系  
圖。云。湛。增。實。為。義。子。諸。或。住。吉。神。主。ニ。養。ハ。セ。ナ。ト  
說。紛。々。今。并。載。備。考。  
ニ。テ。此。彼。ニ。ソ。置。ケ。ル。自。段。首。至。此。為。義。始。末。諸。本  
互。有。異。同。茲。別。出。于。下。可。并  
考。

○京師本杉原本竝云。個様ニ親シキヲハ親シキ  
ニ斬セテ後。左馬頭ノ許ニ仰下サレケルハ。為

義汝カ許ニ在ト聞召首ヲ勿テ進ラセヨト仰ケレハ再三辭シ今度ノ軍功ニ申換ヘキ由歎甲間サラハ餘人ニ仰下サルヘキ由宣旨頻也義朝鎌田ヲ招云云此間義朝言同本書正清敕宣ニハ親ノ首ヲ斬トハ古キ諺ニテ候昔モ候ヘハコソ觀經ノセツサウヲ見候ニ毘陀論經ヲ引テ云劫初以來國ヲ貪ラン為ニ父ヲ害スル惡王一萬八千人ト見ヘテ候國ヲ取位ヲ奪ハントテ父ヲ殺ス王タニモ是程多ク候朝敵ト成道

レ難クマシマス御命ヲ人手ニ懸給ハン事申中面目ナキ事ニ候ハスヤ其上左許ノ忠功ヲ此一事ニ依テ空シクナサセ給ハン事如何有ヘク候ラン竊ニ失進ラセテ後ノ御孝養ヲコソ能クニ奉ラセ候ハメト勸申義朝物モイハスサラハ汝能様ニ計ヒ申セトソ宣ケル正清左候ハ御對面候テスカシ給ヘト申ケレハ流ル、涙ヲ押拭サラ又體ニモテナシ入道ノ御前ニ參義朝今度合戰ノ大將軍トシテ忠節



ヲ致シ。數輩ノ若黨打死手負候。然共イニ夕軍  
功ノ賞ニモ預ラス。御首ヲ刎テ進ラセヨト。度  
度仰下サレ候間。今度ノ忠賞ニ申換テ。御命計  
ヲ申助候。但清盛ハサセル忠功モ候ハ子共。大  
國數多賜リ。一族朝恩ニ誇候。義朝ナトハ頭ヲ  
差出スヘキヤウモ候ハス。ワレニ角テ御渡リ  
候ヘハ。人ノ口ハワロキ物ニテ。如何ナル讒言  
ヤ出來候ハシ。東山ニ菴室ヲ構持テ候。貴キ所  
ニテ候ヘハ。彼ニ渡ラセ給ヒ。靜ニ御念佛候ヘ

カシト申。入道先涙ヲ落シテ。哀人間ノ實ニハ。  
子ニ過タル物コフナケレ。子ナラサラン者。誰  
カハ角身ニ換テ助ヘキ。生々世々ニモ此恩忘  
ルマシト。手ヲ合悦給フ。義朝心中ニハ痛ハシ  
ヤ。唯今斬レンヲ知給ハテ。角宣フヨト思ヒケ  
レハ。涙ノ進ムヲサラヌ體ニモテナシ。サラハ  
正清御輿進ラセヨト宣ヘハ。白木ナル輿車ヲ  
引出ス。流石名殘惜ケレハ。出モヤリ給ハサル  
ヲ。正清疾クト申程ニ。心ナラス乘給フ。夜半許

ノ事ナレハ。何クモソコトハ知子共。東ノ方へ  
ハ行ス。七條西朱雀へ引テ行。波多野次郎京師本誤  
作和田。今從杉力者共ニ輿昇セテ出來タリ。鎌  
原本下効之。田朱雀ニテ車ヨリ輿ニ乗移給ハニ所ヲ打奉  
ラント。太刀ヲ構テ待。波多野ハイマタ此。事能  
モ心得サリケレハ。鎌田カ袖ヲ扣ヘテ。ヤ殿。是  
ハ如何ナル御計ヒソ。既ニ失奉ラン時ニコソ  
アナレ。實ニ入道殿ノ朝敵ト成給フハ。力及ハ  
サル事也。サレトモ今度頭殿ノ大將軍ヲ承給

フモ誰故ヲ。入道殿ノ御威勢也。東國ノ輩多ク  
半屬奉ルモ。又入道殿ノ御讓故ソカニ。救命チカ  
ラナシト云トモ。正ニキ父ノ御首ヲハ争カ斬  
給ヘキ。返ス返スモ口惜事ヲヤ。明日ハ天下ノ  
口スサミト成人ニ指ヲサレ給ハニ。頭殿ノ  
御惡名コソ心憂ケレ。抑昔伊豫殿。相模守ニテ  
鎌倉ニ渡ラセ給ヒシ時。東八箇國ノ士。八幡殿  
ヲ主ト憑ミ又者ヤ有シ。其子ニテマシマセハ  
入道殿モ我等カ主。其子ニテマシマセハコソ

頭殿モ主ナレ。中ニモ和殿ハ。入道殿御跡懐ニ  
テオフシ立ラレ。御好深キ人ツカシ。争カヤミ  
クト討奉ラントハシ給フソ。助ケ奉ル迄コソ  
ナクトモセメテハ角ト申。最期ノ御念佛ヲモ  
勸給ヘカシト云ケレハ。鎌田サラハ和殿其様  
ヲ申給ヘト云。義通車ノ轅ニ取附泣ケ申ケル  
ハ。イマ夕知給ハスヤ。頭殿御承。正清カ太刀取  
ニテ。唯今車ト輿ノ間ニテ討レ給フヘキニテ  
候トテ。袖ヲ顔ニ押掩シ。涙ニ咽テウツフシケ

レハ。入道大ニ驚。口惜キ事コサシナレ。義朝サ  
テハ出拔ケルヨナ。哀ハ郎カ能云ツル物ヲ。角  
有ヘキト知タラハ。六人ノ子共ヲ前後ニ立。矢  
種ノアラニ限射盡シテ打死シタラハ。名ヲ後  
代ニ揚テマシ。サテハ犬死セシスルニコソ。今  
度合戦ニ院方勝給ヒ名ラハ。如何ナル勲功ニ  
モ。又命ニカヘテモ。ナトカ義朝一人ヲ助サル  
ヘキ。哀親ノ子ヲ思フ様ニ。子ハ親ヲ思ハサリ  
ケルヨ。諸佛念衆生。衆生不念佛。父母常念子。子

不念父母。ト佛ノ説給ヘルハ少モ違ハス。但角  
ハアレ共。全ク我子ワロカレトハ思ハヌ也。願  
ハ上ニハ梵天帝釋。下ニハ堅牢地神ニ至迄。義  
朝カ逆罪ヲ助給ヘト宣モハテス。涙ニ咽ヒ給。  
敷皮半疊ヲ構タレハ其上ニ下居テ。汝等モ思  
ヘカシ。子ヲ思フ習。何レヲワキテ疎ナルヘキ  
ニハナケレ共。六條堀河ノ當腹四人ノ稚キ者<sup>キ</sup>  
共。殊更不便ニ覺ユ。相構テ此等ヲハ義朝ニ申  
助ケテ。ヨクハ子トモ思ヘ。ワロクハ斬テモ捨

ヨ。杉原本云。ワロクハ家人トモ思ヒナシ。憐給ヘ。云云。 弓箭取者ハ。親ニ  
キニ過タル方人ハナキノ。彼等四人オヒ立タ  
ラハ。能郎等百人ニハ換マシ也。ト能ク云ヘシ  
トテ。又涙ニ咽ヒ給フ。為義日來願ケルハ。男子  
ヲ六十六人儲テ。六十六箇國ニ一人ツ、置ニ  
ト思ヒケレ共。心ニ任ヌ事ナレハ。男女四十六  
人ソ持ケル。嫡子義朝ヲハ熱田大宮司ノ塔ニ  
ナシ。熊野別當。住言神主ヲモ塔ニ取。其外ノ子  
共ヲモ面ケニ廣カラシ中ヘ入テ。世ニアラン

トソ思ヒケル。哀老ノ果ニハ興アル事ニモ遭ケル物哉。伊勢平氏カ郎等共ニ引張レテ。子共ノ面ヲヤ穢サント思ヒタレハ。吾子ノ手ニ捕レ。相傳ノ家人ノ手ニ懸リ。失ナニ事ノ不思議サヨ。父ヲ斬ル子。子ニ斬ル父。宿執ノ拙キ事。恥ヘシ恨ヘシ。疾々仕レ。夜明ハ為義カ斬ル見ントテ上下集リタランニ。若斬損シナハ首ヲ能持テ。惡ク持テナト。沙汰セン事コソ口惜ケレ。已等ハ相傳ノ家人ナレハ。縱惡クトモ名

ヲハタテシ。ナシカハ又惡カルヘキトテ。西ニ向ヒ高聲ニ念佛數十遍唱ヘ。手ヲ合テ待。正清モ相傳ノ主ノ首ウタニ事。流石恐ニクヤ思ヒケン。義通ニソレト云。義通ハ又我ハ承ラストテ退ケレハ。正清カ郎等太刀ヲ拔テ立廻リシト、打。暗サハ暗シ。太刀ノ當所少下リ。玉懸骨ニソ切附タル。入道見返リ。ナト正清ハ仕ラヌソトテ。彌念佛高聲ニ唱ケル所ヲ。次ノ刀ニ打落ス。杉原本云。御首持テ。周防判官季實是ヲ實

檢シテ首ヲハ義朝ニ返シ給ヒケレハ。軀トモ  
ニ輿ニ入。為義山莊北白河圓覺寺ニテ煙トナ  
シ。心ノ及ヒ弔ヌ云云。

○鎌倉本云。為義ヲハ義朝ニ仰テ是ヲ斬ラル。義  
朝。鎌田ヲ呼寄テ云ケルハ。安藝守已ニ平馬助  
ヲ斬。宣旨ナレハトテ。義朝如何逆罪ヲハ犯ス  
ヘキ。此。事コソ由ケ敷大事ナレ。正清申ケルハ。  
敕宣ニハ親ノ首ヲ斬ト申ハ。犬打小童部ニテ  
モ知タル事也。左許ノ奉公ヲ致。此事ニ限テ宣

旨ヲ背給ハシ事。何様ニカ有ヘカラシ。加祿ノ  
事コソ奉公ノ程モ見ユル事ニテ候ヘ。若御辭  
退候ハシニ附テハ。他人ニ仰附ラル、事ヤ候  
ハン。如何人手ニハ懸ラルヘキ。討奉リテ御孝  
養ヲコソ能ク申サセ給ハメ。且ハ安藝守殿已  
ニ左様ニ候也。仔細ニヤハ及ヘキト申ケレハ。  
チカラ及ハヌ事ニコソトテ。鎌田入道殿ニ申  
ヘキハ。今度ノ合戦ニ奉公ヲ致候事。清盛義朝  
何ノ勝劣候ハヌニ。義朝ヲハ遙ニ思召落サシ。

面目ナキ次第ト存候へハ。東國へ罷下ハヤト  
存候。ソレニ取テハ。早晚打連進ラセン事。人聞  
恐アル方モ候へハ。義朝ハ海道ヲ罷下候。ソレ  
ニハ船ニ召。紀伊地ヨリ御下候へシト申テ。爰  
ヲハ出シ奉リ。其後何様ニモ汝カ計ソト云ケ  
ル間。波多野小次郎相共ニ。輿車ヲ用意シテ。入  
道ノ前ニ行向。關東下向ノ由ヲ申。何様ニモ。ソ  
レノ計ニテコソアラメト云ケレハ。御輿ハ儲  
テ道ニ候。ソレマテ是ニ召候へトテ。車ヲ指テ。

入道何心モナク取乘。七條ヲ西へ引出ス。義通  
ハトマタ此心ヲ知サリケルニ。鎌田朱雀ニテ  
輿ニ移シ乗奉ラシ所ニテ討奉レト申。其時義  
通。ヤ殿。是ハ何様ナル御計ソ。失ヒ奉レトコソ  
アレ。實ニ判官殿朝敵ト成給コソ悲ニキ事ナ  
レ共。今度頭殿大將軍ヲ承奉公ヲ致給フモ。併  
判官殿ノ御恩ヲカシ。親ノ恩ハ報ニテモ盡又  
事ニテコソアレ。サコソ敷宣ト云共。如何正シ  
キ親ノ首ヲハ斬給フヘキ。下野守殿コソ加様

ニ情アラストモ。各ハ御跡懐ヨリオフニ立ラ  
レタル身也。争カ情ヲカケ奉ラサルヘキ。最期  
ノ十念ニタニモ及給ハサラシハ後生菩提迄  
モ罪深キ事ソカシ。サレハ義通ハ告申サント  
思フ也ト申。鎌田何様ニモ和殿ノ計ソト申。義  
通馬ヨリ飛下。車ノ轅ニト附。君ハ知給ハスヤ。  
頭殿宣旨ヲ蒙オハシマシ候ニ依テ。失奉ルヘ  
キニテ候トテ。涙ヲ流シテヒカヘタリ。其時ハ  
道我ヲハ出抜ケルナ。宛心憂ノ有様ヤ。サラス

ハ何ト云事ノ有ヘキソ。兔角云ニモ及ハス。ナ  
ハ疾ヨリモ告知セサルソ。サハイトテトテ。七條  
朱雀ニテ車遣トメサセ。敷皮取寄下居テ。涙ヲ  
押ヘクトカレケルハ。是程ノ事ヲハ兔角ニモ  
及ハキトモ。口惜キ事ヲモシツル下野守哉。正  
ニク君ヲ討タル者ヲモ。扶ルハ常ノ情ソカシ。  
如何ナル野山ノ末ニテモ。死ハヤトコソ思ヒ  
シカトモ。サテアレハ。ナトカ命計ハ申請サラ  
シ。今ハ片隅ニ念佛申。後生扶ラント思ヒテユ



之。打憑恥ヲ捨來タリツレ。カ、ルヘシト知タ  
リセハ。何ノ浦ニテモ失ナマシ。神ナラヌ身コ  
ソ口惜ケレ。我心カラモトカシカリケルモノ  
哉。今度院方勝セオハレマシテ。下野守斯ル罪  
ヲ蒙ランニハ。入道ハ勲功ニモ命ニモ替テ  
物ヲ。下野守ハ個様ニ情ナケレトモ。入道ハ尚  
子ヲ思フ心盡スシテ。下野守カ向後ヲ思置ニ。  
後世ノ礙トモ成ヘキハ如何。其故ハ。入道ハ行  
末近キ身ナレハ。惜カルヘキ命ニテハナケレ

兵。下野守父ノ頭斬タリト云。惡名立ニ痛ハシ  
カヨ。ソレモサル事ニテ。幾程ノ榮ヲ播サント  
テ。親ノ首ヲ斬ラント。君ニモ臣ニモ雅量セラ  
レテ。只今皆キタテラシハ如何。個様ニ情ナ  
キ心ナレハ。第共ヲモヨモ扶ケシ。皆角コソ失  
ハメ。今コソ角ハ有トモ。自然ノ事ノアラン時  
ハ。如何猛ク思フトモ。一人ニ成テハ太事ニテ  
コソアラメ。弓箭取者。親シキニ過タル實ハナ  
キ物ヲ。定テ悔シクコソアラメ。大方此事ニ於

後醍醐天皇御記

卷之三

テハ。下野守カ一期ニ限ラス。子孫ノ末迄モ覺  
東ナクコソ覺ユレ。ソレニ取テ一人悦アリ。個  
様ノ有様ニテハ。賢クソ平家ノ方ヘ渡サレサ  
リケル。左様ナリセハ。家ノ爲身ノ為。如何心憂  
カラマシ。我子ノ手ニ懸リテ死スルハ。返シモ  
嬉シク。汝等ハ又同郎等眷屬ナカラ。幼少ヨリ  
オフシ立シ者共ソカシ。最期ノ事。云沙汰シツ  
ルコソ哀ナレ。已等カ恥ナレハ。最期ノ惡カリ  
ツルヨモイハシ。ワルサマニ附テモ。ヨカリソ

ルトコソ語ラヌ。ソレニ附テモ心安シサテハ  
入道老後ニ臨テ出來タリシ稚キ者共コソ。サ  
スカ無慚ニ覺ユレ。イトナシキ者共コソ有ト  
モソレマテハヨモ御尋ハアラシ。且ハ母カ歎  
カン不便ナルニ。相構テ扶置テ。能ハ郎等眷屬  
ニモ仕。惡夕ハ舍人ナリ草薙ニモ仕ヘシ。是モ詮ハ  
下野守カ事ヲ思フ故也。我子ノ手ニ懸リテ汝  
等カアヘハコソ。カ、ルクタクシキ事ヲモ云  
置ツレ。他人ノ手ニアラマシカハヨモイハシ。

云々事ハイヒツ。今ハ角コソクモ切手ハ誰ク  
相構テ正清仕ルヘシ。郎等ニ斬スナ。下藤ハ如  
何カ不覺ナルゾ。正清カ斬ヲ正シク下野守カ  
手ニ懸リタルト思ハンフトテ。西ニ向合掌シ。  
高聲ニ念佛五十遍許唱ラル。其時此者共餘カ  
ハユカリケル上。主ノ首斬タリト云レン事モ。  
流石ニヤ覺ケン。正清ハ義通ニソレト申。義通  
ハ知ストテヨリノキタリ。遙ニ程經ケル間。太  
刀ヲ拔テ郎等ニトラス。郎等餘リサケテ打。主

カケ骨ヨリ胸ヘソ切附タル。入道穴心憂ヤ。正  
清仕レトテ。彌シケク念佛ス。次ノ太刀ニソ切  
落シケル。季實是ヲ實檢ス。其次ニ。左衛門尉時  
弘ヲモ此ニテ斬テケリ。判官入道ノ首實檢ノ  
後。義朝ニ返シ給。云云。以下與京師  
杉原本同。  
○半井本云。叔父ヲハ姪ニ斬セテ後。義朝ニ為義  
カ首ヲ刎テ進ラセヨト仰ラル。義朝ハ清盛カ  
和讒ヲハ曉ラスレテ。正清ヲ呼テ。コハ如何セ  
ン。清盛既ニ叔父ヲ斬ヌ。宣旨ヲ重ニシテ。父ノ

首ヲ刎ナハ。五逆罪云云。此問義朝正清問答。頗同本書。故畧之。正

清如何ニモ計テ斬奉レト宣。正清判官殿ニ參。

頭殿ノ申セト候。今度合戰ニ。義朝清盛大將ヲ

承テ。朝敵ヲ追討レ候上ハ。兩人勲功ノ賞ハ勝

劣アルヘカラス候ニ。清盛一類皆朝恩ニ誇リ。

義朝ハチキカ代ニテ候ヘハ。アチキナク候。今

ハ東國ヘ罷下。足柄山塞テ暫支一期ハ免テモ

角テモ候ナシ。正清ハ入道殿ヲ具レテ。舟ニテ

熊野地ヲ廻テ下候ヘ。義朝ハ海道ヲ罷下ヘト

仰ヲ蒙テ參タリ。御輿車ハ路ニ儲テ候ト申。如

何モ左馬頭カ計ニコソ隨ハメトヲ宣ケル。是

ニ先奉レトテ。白木ナル輿車ニ乘奉リ。夜半許

ニ鎌田次郎波多野小次郎義通二人承テ。東ヘ

ハ行ス。七條ヲ西ヘ遣ルカ。者共輿昇テ來ル。七

條朱雀ニテ。車ヨリ輿ニ乗移ラン所ニテ。知セ

スレテ。ヤハラ御首ヲ斬ヘレト。鎌田計ケレハ。

波多野云。如何鎌田殿カ。ル情ナキ事ヲハ計

候ヲ。八幡殿朝家ノ御守ニテ渡ラセ給ヒ。判官

殿ノオハシマセハコフ。其子ニテ殿ハ大將ヲ  
モ承テ。朝恩ニモ誇給へ。父ノオハセハコフ人  
トモフタ、セ給へ。何事ノ恨ヲハストテモ。正  
シキ親ニ。ツラク當リ給フ事ハナキ物。然モ  
是ハ公ノ敵ニ成給ヒヌレハ。互ニ御遺恨ヲ結  
給フヘキニ非ス。人ノ身ニハ一期ノ終ヲ一大  
事トス。ヤミクト失ヒ奉ラハ。後生菩提モ徒ニ成  
ヘシ。此事ヲ顯シ佛ノ御名ヲモ唱サセ進セヌ  
ラハ。親子ノ情モ主従ノ哀モアラシ。昔伊豫殿

相模守ト申シ時仕ハレ始テ。其御子ニ八幡殿  
ヲ主ト頼テヨリコノカク以來。八幡殿ノ御子ナレハ。入  
道殿モ我等カ主。其御子ナレハ。頭殿モ我等カ  
主。相傳ノ主ニ。此事知セ奉ラサランコソ罪深  
ケレ。此事申テ最期ノ十念ヲモ勸メ奉ラハヤ  
ト申セハ。鎌田正清云云。此間與本書  
岡崎本同。波多野車  
ノトカ轅ニ取附申ケルハ。云云。此間與京師  
本杉原本同。討レ給  
ハンスルニテ候。閑ニ御念佛申給ヘト申。義法  
房大ニ驚。如何疾ハ告サルヲ已等ト宣モアヘ

ス。涙ニムセヒケリ。七條朱雀ニテ車ヨリオリ。敷皮シキテク居奉ル。入道宣ケルハ。口惜キ事スル左馬頭哉。慥ニ君ヲ射タル者モ。助カレハ助カルソカシ。如何ナル山林ニテモ死ヌヘカノツレトモ。命ハ捨難キモノナレハ。打頼テ向タレハ。勲功ノ賞ニ申替テモナトカ助サルヘキ。義朝加様ニ成テ。我ヲ頼來ラシハ。入道カ命ニ申替テモ助クヘシ。親ハ子ヲ思ヒ。子ハ父ヲ思ハヌ習ナレハ。殺サルレトモ。我子ヲハ惡

コト思ハヌソ。只今人ノ口ニ落ヘキ事ノ兼テ思ヤラルハ。ソトヨ。イカ程ノ榮花ヲ期シテ。父ノ首ヲハ斬フ。不當ノ者也ト。親ニモ疎ニモ定テ疎ニハテラレン。哀ハ如云云。此間與京師犬死センスルニコソ。但入道一ノ悦アリ。平家ノ手ニ懸テ斬ラレタラハ。最期ノ有様。能テモ惡テモ沙汰セラレ。家ノ瑕ニモ成。義朝カ為惡カルヘキニ。我子ノ手ニ懸。相傳ノ已等ニ斬ルハ。コソ嬉シケレ。時刻移リ萬人集タラハ。惡クモ

斬ツル。臆シテ首ヲアヒク持テコソト云ハニ  
ニ。人ノ見又間ニ疾々仕レ。年來ノ者共ナレハ。  
惡名ヲハヨモ披露セシ。今ハ限ニ成ケレハ。一  
筋ニ思切タレトモ。山野ノ獸ケモ江河ノ鱗コシモ命ヲ  
惜ムナレハ。増テ人間ニハ。命ニ増テ惜キ寶何  
カナルヘキ。獨身ナル犯科人カ。思置事モナク。  
重科ニ依テ手足ヲモ體モヤツサルハモ。一日  
ノ命ヲタヘトソ降ヲハ乞。増テ為義何カ心ノ  
留ラサルヘキ。為義日來云云。此間載為義男女  
事與京師本杉原

本同故西ニ向テ最期ノ詞ヲ無懺ナル。弓矢取身  
ノ習。興アル事哉。伊勢平氏云云。此間與京師  
本杉原本同家  
人正清カ手ニ懸ランコソ神妙ナレ。然モ朝敵  
ト成テ斬レン事。誠ニ面目也。予矢取身ノ名聞。  
何カ是ニシカン。此詞終ラサルニ。正清首ヲ討  
ントス。目昏膽消テ叶フミレケレハ。側ナル者  
ニ太刀ヲ讓ル。請取テ是ヲ斬。暗サニ肩ヲソ打  
タリケル。少モ騷カス念佛兩三遍申。次ノ太刀  
ニ首ハ落。正清袖ニカキ入是ヲ懷ク。周防判官

後醍醐天皇御記

卷三

季實ヲ差遣首ヲ實檢ス。以下與鎌倉本同。

○京師本杉原本鎌倉本竝云。清盛郎等平家貞ハ鎮西ニアリ。此合戰ヲ聞テ急キ馳上タリケルカ。播磨守ニ向テ恥シメケルハ。弓矢取ト申ハ殊ニ情モ深ク哀ヲモ知<sup>ナ</sup>助クヘキヲハ助ケ。哥スヘキヲモ赦シ給ヘハコソ。弓矢ノ冥加モ有テ。家門繁昌スル習ニテ候ニ。叔父叔母ハ親ノ如シト云本文ノ候。叔父ハ既ニ父ニ同シ。冥見ノ眸<sup>マユリ</sup>恐レスハアルヘカラス。然ルヲ下野殿判

官殿ヲ斬ラル、事敢テ人ノ上トハ思召ヘカラス。併平馬助殿ヲ斬奉ラル、故ニ非スヤ。加様ノ御心ニテハ。朝家ノ御固トモ成<sup>ナ</sup>君ノ御守トモ成給ナニヤト。カキ口<sup>クハ</sup>説<sup>トキ</sup>涙ヲ流シケレハ。清盛實ニ理ト思ハレケレハ。口ヲ閉<sup>トク</sup>テスヘリニケリ。云云。

昨日官使能景ニ仰テ多田藏人大夫頼憲カ。正親町富小路ノ家ヲ追捕セラレケルニ。頼憲カ郎等四五人イマタ家ニ有シカハ。命モ惜マヌ散ケニ



戰ケル間。能景カ兵多ク討レ劊ヲ被テ引退。其間

ニ屋ニ火懸。烟ノ中ニテ皆自害シテケル。以上能景追捕

賴憲家一節。京師杉原鎌倉半井本並。無。今日十九日。源平七十餘人首

ヲ斬レケルコソ淺ニケレ。京師杉原本並云。十

鎌倉半井本並云。二十五日源平十七人首ヲ劊云。云。按。下段。半井本與此齟齬。蓋本書諸本說。共為可疑。諸實錄說見于下。可并見。

○歷代皇紀云。保元元年七月二十九日謀反件類

等斬其頭。按。一代要記。皇代畧記。百練鈔。日時皆同。為義忠正家弘等

類有其數

○帝王編年記云。保元元年八月二十九日。為義以

下被斬首事。平忠正法師。源賴憲法師。平家弘法

師。源為義。左衛門佐源賴賢。同賴仲。為家。為成。大

炊助平度弘。家弘子左衛門尉盛弘。左兵衛尉時弘。

光弘法師。家弘子安弘法師。同賴弘新院藏人長

盛。忠正子左府別當忠綱。同上。按此作左府別當誤也。保元物語諸本及系圖

作二男。皇右宮侍長忠綱。三男。左府勾當正綱。國正。同上。保元物語諸本及系圖前

龍口資泰

○按為義以下被斬。諸實錄皆為七月二十九日。唯

按為義以下被斬。諸實錄皆為七月二十九日。唯

帝王編年記作八月者蓋訛矣

中院左大臣雅定入道

據公卿補任。左當作右。太政大臣源雅實子。久壽元年出

家。此下半并本載。內大臣實能。

大宮大納言伊通卿。東宮大夫宗能

卿。左大辨宰相顯時卿。ト申サレケルハ。

○按罪科僉議一節。京師杉原鎌倉半井四本。出于

為義忠正等降參下。而京師本杉原本云。又內裏

二八。中院雅定

此下公卿唯杉原本同。本書

ヲ召抑為義出家

レテ義朝力許ニ來ル由。罪科如何ト御尋アリ。

畏テ申ケルハ。彼為義ハ武勇ノ家ノ正統トシ

テ。今度合戰ノ大將誠ニ其罪道レ難シトイヘ

トモ。齡六十二餘リ重病ヲ得。出家入道ニテ降

參シタラニシ。如何ハ誅セラルヘキ。嵯峨天皇

御時云云。鎌倉本半井本云。今度合戰ノ輩罪科

載諸卿名

昔嵯峨天皇御時左兵衛督仲成

贈太政大臣藤種繼子。左兵衛。京師

本杉原本作右兵衛。為是。鎌倉本作左衛門。半井本作右衛門。共非也。

シ誅セラレシ

ヨリ以來久シク死罪ヲ停ラル

京師杉原鎌倉本

二定ラレシカ共死スル者二度歸ラス。遠流無歸ノ罪ハ死罪ニ同シト云。遠國へ遣サレシヨリ以

來。本朝ニ死罪ヲ停  
ラレテ年久ニ云云。

○日本紀畧。日本後紀纂竝云。弘仁元年九月戊戌  
朔癸卯。依太上皇命。擬遷都於平城。正三位坂上  
宿禰田村麻呂。從四位下藤原朝臣冬嗣。從四位  
下紀朝臣田上為造宮使。丁未。緣遷都事。人心騷  
動。仍遣使鎮固伊勢近江美濃等三國府。并故關  
故日本紀畧。擊右兵衛督從四位上藤原朝臣仲成  
於右兵衛府。詔曰。云云。尚侍正三位藤原朝臣藤  
子者。栢原朝廷。乃御時。爾春宮坊宣旨。止為仕

賜此于今太上天皇爾親仕奉爾依天思忍都御  
座然猶不飽天二所朝廷母言隔天遂爾大亂可  
起。又先帝乃萬代宮止定賜開平安京乎棄賜此  
停賜之平城古京爾遷半奉勸天天下乎擾亂百  
姓乎亡弊。又其兄仲成已加妹乃不能所波不教  
正之親王夫人平陵侮氏棄家棄路氏東西辛苦  
世之如此罪惡不可數盡理乃任爾勸賜比罪奈  
賜之布閑有止毛所思行有依氏輕賜比宥賜比藥子  
者位官解氏自宮中退賜比仲成者佐渡國權守

退止宣。又遣使告于栢原陵曰。天皇御命云云。戊申正四位下藤原朝臣真長。從四位下文屋朝臣綿麻呂等被召。自平城宮來。禁綿麻呂於右。日本紀畧作衛士府。大外記從五位下毛野朝臣穎人。從平城急來言。太上天皇今日早朝。自川口道入於東國。凡其諸司并宿衛之者皆從焉。于時遣大納言正三位坂上大宿禰田村麻呂等。率輕銳卒。從美濃道邀之。田村麻呂奏請綿麻呂武藝之人。頻經邊戰。幕將同行。即授正四位上。拜參議。以遣之。歡

喜踊躍。即駕兵馬。又置宇治山崎兩橋。與渡市津頓兵。是夜命左近衛將監紀清成。右近衛將曹住吉豐繼等射殺仲成於禁所。

○公卿補任云。藤仲成弘仁元年九月十日遷佐渡權守。同十一日伏誅。年三十七。

依于一條院御宇。長德二內大臣伊周公。關白道隆子并

權中納言隆家卿。京師杉原鎌倉半并本不載隆家

也。據公卿補任。長德元年自花山院。射奉リニ力

權中納言轉正。此所權字。射舊誤作。討今改之。

○京師本杉原本竝云。又長徳ノ比。花山法皇紅ノ袴ヲツキノヘサセ奉リ。高アシニメサレ。築垣ニ御尻ヲ懸。ヨナク御遊アル事アリシヲ。或時内大臣伊周奏セラルヘキ事アリテ。小夜深方ニ參内セラレケルカ。是ヲ見奉リ。變化ノ者ト心得テ射奉リシカハ。其罪ハ逆ニ及フ由。法家考申シカ共。大同ノ例ニ任セ。死罪一等ヲ減シ。遠流ニ處セラレキ。云云。半井本云。長徳比。花山法皇化モノ御尻ヲシテ道ヲ行給。前足ト云物ヲ召。築垣ニ御尻ヲカケテ。紅ノ袴ヲ續集。土ニサカル程ナルニ。

カミニモ同色ノ御衣ヲ著テアリシヲ。伊周公ハケモノト思テ射奉ル。云云。此下同本書罪既斬刑ニ當ル由。法家ノ輩勸申シカ共。死罪一等ヲ減シテ。遠流ノ罪ニ宥ラル。

榮花物語云。カノ殿太政大臣藤為光女君達ハ。鷹司ナル所ニワ住給フニ。内大臣殿伊周忍ヒツ、オハシ通ヒケリ。寢殿ノウヘトハ。三君為光女ヲク聞ヘケル。御貌モ心モヤニ事ナフオワストチ。父大臣イミシフ冊カシフキ奉リ給ヒキ。女子ハ貌ヲコソト云事ニテワ。カシツキ聞ヘ給ヒケル。其

寢殿ノ御方ニ。内大臣殿ハ通ヒ給ヒケルニナ  
ニアリケル。カ、ル程ニ花山院此四君三君ノ妹  
御許ニ御文ナト奉リ給ケシキタ、セ給ヒケ  
レトケシカラヌ事トテ聞入給ハサリケレハ。  
度々御ミツカラオハシマシツ、今ムカレフ  
モテナサセ給ヒケル事ヲ。内大臣殿ハヨモ四  
君ニハアラシ此三君ノ事ナラント推量リオ  
ホイテ我御ハラカラノ中納言隆家ニ。此事コソ  
安カラス覺ユレ。如何スヘキト聞ヘ給ヘハ。イ

テタ、巳ニアツケ給ヘレ。最安キ事トテ。サル  
、キ人ニ三人具シ給ヒテ。此院ノ鷹司殿ヨリ。  
月イトアカキニ御馬ニテ歸ラセ給ヒケルヲ。  
オトシ聞ヘントヲホシ置テケル物ハ。弓矢ト  
云モノシテ。トカクシ給ヒケレハ。御ツノ袖ヨ  
リ矢ハトヲリニケリ。サコソイミシフオ、レ  
ウオハシマス院ナレト。事カキリオハシマセ  
ハ。イカテカハラツロレトヲホサ、ランイト  
ワリナフイミシト思召テ。院ニ歸ラセ給ヒテ。

後醍醐天皇御記

卷之三

物モ覺サセ給ハテツオハシマシケル。是ヲオ  
ホヤケ院一條ニモ殿長藤道ニモイト能申サセ給  
ヒツヘケレト。事様ノモトヨリヨカラヌ事ノ  
オコリナレハ。恥カレウオホサレテ。此事チラ  
サレ。後代ノ恥ナリト忍ハセ給ヒケレト。殿ニ  
モオホヤケニモ聞召テ。大方此比ノ人ニ口ニ  
入タル事ハ。是ニナシナリケル。太上天皇ハヨ  
ニメテタキモノニオハシマセト。此院ノ御心  
ヲキテノオモリ。必スオハシマセハコツアレ。

サハアリナカラ。イトくカタシケナクオソロ  
シキ事ナレハ。此事カク音ナクテハヨモヤマ  
シト。世人イヒ思ヒタリ。云云。按此條係長徳元年カクイ  
ノ程ニ長徳二年ニナリヌ。云云。又云。世ノ中ニ  
アル檢非違使ノカキリ。此殿ノ四方ニ打圍タ  
リ。タチユミタルケシキ。ミチオホチノ四五町  
許ノ程ハ。ユキハモセヌ。イトケオソロシキ云  
云。カハル程ニ。カクミタリカハシキ物ノナカ  
トモヲカキワケサルカタニウルハシクサウ

ワキタルモノ。南表ニタ、マイリニ參ル。コハ  
ナニシニカト思フ程ニ。宣命トイフモノヨム  
ナリケリ。キケハ太上天皇ヲ弒シ奉ラントシ  
タル罪一ツ。帝ノ御母后ヲノロハセ奉リタル  
罪ヒトツ。オホヤケヨリ外ノ人。イマタオコナ  
ハサル太元法ヲ。私ニカクシ行ハセタル罪ニ  
ヨリ。内大臣ヲ筑紫ノ帥ニナシ流シ遣ハス。又  
中納言ヲハ出雲權守ニナシテ。流シ遣ハスト  
イフ事ヲノ、シル。云云。按榮花物語長徳二年  
四月二十四日左遷伊

周於筑紫帥隆家於出雲權守二人各就途既而有特詔暫留伊周於播磨隆家於但馬伊周在播磨數月聞母憂思辭結疾甚病也落京匿居焉於是朝議遂流伊周於筑紫隆家於出雲長徳四年遭赦歸榮花物語詳載其始末與諸實錄有異同然事不專關本書且章段甚長因畧撮其要耳。

○愚管鈔云。長徳二年四月。伊周内大臣ト。弟ノ隆家ト左遷セラレテ。内大臣ハ太宰權帥。中納言隆家ハ出雲權守ニ成テ各流サレケル事ハ。花山院ヲ射進ラセタリケルナリケリ。其事ノ起リハ。法住寺太政大臣為光ハ恒徳公トシ申。此人ニ三人ノ女アリケリ。一女ハ花山院御道心



發サセ進ラスル人ニテ。失給ヒテ後道心サメ  
サセ給ヒテ。其中ノ女ニ通ハセ給ヒケルニ。又  
三ノ女ヲ伊周大臣ハ通ヒケルヲ。此院ノヤカ  
テ此三ノ女ノ方ヘモオハシマス人ノイヒ  
ケルヲ。安カラス思ヒテ。弟ノ隆家帥ハ十六ニ  
テアリケルニ。如何センスル安カラスト云ケ  
ル程ニ。隆家ノワカク。イカウキヤウナル人ニ  
テ。窺テ矢ヲモチテ射進ラセタリケレハ。御衣  
ノ袖ヲ築地ニ射ツケタリケル。アヤウナカラ

逃サセ給ヒテ。此事ヲハヒシト隱シテアリタ  
リケルヲ。ヤウク披露シテ。左程ノ事争カサテ  
有ヘキトテ。沙汰共有テ。此事ハナリケルト云  
傳タリ。サレト小野宮記ニハ。ヤカテ其夜ヨリ  
聞ヘテ。正月十三日除目ニ。内大臣ノ圓座ト、  
レタリケル。尤ニカルヘシト時ノ人イヒケリ。  
細ニ其日記ニハ侍レハツレヲ見ルヘキ也。此  
トカナレト。御堂ノ御アタヲカナト人思タリ  
ケレハ。返ケイタマセ給ヒケリ。各後ニハ召返

サレテ内大臣ハ儀同三司ト云位ヲ賜リ隆家  
ハ帥ニ成テ下リナトシテ富アル人ニナシイ  
ハレケリ帥ニ成テ筑紫ニ下リテイヒシラス  
徳ツキテノホリタリケルニイツシカ御堂へ  
参タリケルニ出合セ給ヒタリケレハイトモ  
申ユトハナクテ名簿ヲ書テ懐ヨリ取出シ進  
ラセテ出ニケルイミシク心賢カリケル人也  
トユツ承レ又云伊周年二十三在官三年長徳  
四年閏十二月十六日叙本位依東三條院御惱

大赦之次也ソ并ニ寛弘七年二月二十五日宣旨列大  
臣可朝議者

○百練鈔云長徳二年正月十六日内大臣伊周中納  
言隆家於恒徳公為一條第奉射花山院御童子  
二人被殺害取首持去云云四月二十四日諸陣  
警固内大臣伊周任太宰帥中納言隆家貶出雲  
權守是依去テ去ス正月奉射花山院并咒咀東三條院  
私行大元法事也五月朔日權帥出雲權守籠中  
宮御所不赴配所仍遣檢非違使追捕宮中捕得

隆家朝臣。權帥遁去。後日於愛太子山捕之。遣配所。今日中宮定子。依帥事出家。十月十日。前帥偷入京之田有其聞。仍仰有司伺之處。在中宮也。仍重令追下。遣有司於中宮令搜出之。奏出家之由。改官府猶不剝頭。令候偽甚者歟。三年四月五日。前帥伊出雲權守等。可召返之由宣下。去月二十五日。依東三條院御惱非常赦。可潤恩詔。否令諸卿定申。遂有恩免也。

○公卿補任云。長德二年四月二十四日。內大臣伊

周坐事。左降太宰權帥。進發之間。為遁罪科出家入道。依病留播磨國。而以十一月日於俗形密々入京。仍差右衛門尉平維時。追遣太宰府。同三年三月二十三日。給官符。召返。十二月入洛。長保三年閏十二月十六日。復本位。寬弘元年九月二十三日。叙從二位。同二年二月二十五日。宣旨。列朝參大臣。下大納言。上十一月十三日。宣旨。預朝議。如元。同五年正月十六日。准大臣給封戶云云。又云中納言隆家。與伊周同坐事。左降出雲權守。長

德四年五月四日任兵部卿。長保四年九月十四日復本位。

○帝王編年記云。長德二年四月二十四日。内大臣伊周太宰權帥。中納言隆家。遷出雲權守。去正月奉射花山院之過也。帥稱病偷有入洛之聞。重被遷太宰府。次年被召返。號儀同三司。云云。

○歷代皇紀云。長德二年四月二十四日。内大臣伊周。中納言隆家坐事。又云。伊周隆家左降詔云。去正月十五日夜。花山法皇奉射危。東三條玉體不

豫。厭魅咒詛。云云。須法律乃任罪。給内大臣太宰權帥隆家出雲權守。云云。

今改テ死刑ヲ行ハルヘキニ非ス。就中故院御中陰也。旁宥ラレハ宜カルヘキ由各申サレケレ共。少納言入道信西内ケ申ケルハ。此議然ルヘカラス。多クノ凶徒ヲ諸國ヘ分遣サレハ。定テ猶兵亂ノ基タルヘシ。其上非常ノ斷ハ。人主專ニ世ヨト云文アリ。世中ニ常ニアラサル事ハ。人主ノ命ニ從フト見ヘタリ。若重テ僻事出來リナハ。後悔何

益アラント申ケレハ。皆斬ラレニケリ。誠ニ國ニ  
死罪ヲ行ヘハ。海内ニ謀反ノ者絶ストコソ申ニ。  
多クノ人ヲ誅セラレケルコソ淺マシケレ。正シ  
ク弘仁元年ニ。仲成ヲ誅セラレテヨリ。帝王二十  
六代。年記三百四十七年。絶タル死刑ヲ申行ケル  
コソウタテケレ。此下。作者評義朝  
一節今悉除之。

義朝弟被誅事

去程ニ左馬頭ニ重テ宣旨下リケルハ。汝カ弟共  
皆尋出シ進ラスヘシ。殊ニ為朝トヤランハ。鳳

ニ矢ヲ放サント申ケル奇怪ノ者也。搦捕テ誅ス

ヘシト也。義朝畏テ方々へ兵ヲ差遣シテ尋ラレ

ケレハ。此彼ヨリ尋出シテケリ。為朝ハ。敵寄ルト

見ケレハ。岡崎本云何地トモナク失ニケリ。京師

半井本云。為朝ハ太原ノ奥ニ在ケルカ。太刀打振

飛カ如ク失ニケリ。云云。鎌倉本云。義憲ト為朝ト

ハ。北山ノ奥ニテ見合ケルカ四郎左衛門頼賢掃

部助頼仲。六郎為宗。七郎為成。九郎為仲。已上五人

ノ人々。都へハ入へカラスト仰下サレケレハ。京師

杉原鎌倉半井本並云。五人ノ人々ハ。大原鞍馬貴

船片生ノ里。所々ニツカレ。卧テアリケルヲ搦捕。

云直ニ船岡山へ井テ行ケル。五人ナカラ馬ヨリ  
 下テ並居タリ。最期ノ水ヲ與フルニ。各疊紙ニテ  
 是ヲ受ケル。半井本云。最期ノ水ヲ與フルニ殘ハ  
 取ス。云云。京師杉原鎌倉三本。無最期  
 云云。中ニ掃部助頼仲。此水京師杉原半井本並云。  
 疊紙ニシメタル水  
 ヲ取テ。少取テ唇ヲ押拭テ。京師杉原本又云。頸ノ  
 廻リ押テ。云云。此下  
 頼仲語。京師杉原鎌倉申ケルハ。我幼少ヨリシテ。人  
 倉本並有異。出于下。  
 ノ首ヲ斬事數多シ。半井本云。身ノ上ノ罪ヲハ。如  
 何スヘシトモ覺ストテ。直垂  
 ノ紐ヲ解。頸ヲ延左様ノ罪ノ報ニヤ。今日既我身  
 テキラル。云云。  
 ノ上ニ成ニケリ。兄ニテオハシマセハ。左衛門尉

殿コソ先立せ給ヒテ御供仕へケレトモ。軍門ニ  
 君ノ命ナク。戰場ニ兄ノ禮ナシト申セハ。死ヲ先  
 ニスル道強テ禮ヲ守ラサルニヤ。其上存スル子  
 細候。日來皇后宮ノ御内ニ申通ハス女アリ。夜前  
 モ來テ見參スヘキ由申侍シテ。叶フ間敷由心強  
 ク申テ返シ候キ。定テ只今モ尋來ラント覺侍リ。  
 最期ノ有様ヲ見ヘテモ詮ナシ。又不覺ノ涙ノ先  
 立ニモ本意ナク思侍レハ。先立申候。六道ノ衢ニ  
 テ必參會奉ルヘク候ト云。直垂ノ紐ヲ解。頸ヲ延

テヲ斬ラレケル。其後四人ヲカラ斬ラレケリ。皆能ク見ヘタリケル。此下。半井本。載于段尾。次日陣頭へ持セテ參ル。左衛門尉信忠中納言藤基忠子。實備中守源信宗子。岡崎本信忠作信兼。是ヲ實檢ス。獄門ニハ懸ラレス。穀倉院ノ南ナル池ノ端ヘソ捨ラレケル。是ハ故院ノ御中陰タル故トソ皆人申ケル。

○京師本杉原本鎌倉本竝云。其中ニ掃部助頼仲申ケルハ。次第ノ任キテ候ハ子トモ。存スル旨候。頼仲先立奉ルヘシトテ進出テツイ居ヌリ。

哀各五人ハ。普通人十八ニハヨモ先ラシ。次第。下至此。京師杉原本竝不載。義朝心狭ク。吾一人世ニアラ

トテ加様ニシ給ヘトモ。自然ノ事アラシク時ハ悔シクオハセン物ヲ。京師杉原本云。一期ノ内モ覺束ナシ。子孫トテモ不定也。角云モ命ヲ惜ムニ似タリ。其事爭カ

リナシ。抑人ヲ斬事ハ其數ヲ知ス。身ノ上ニテハ如何振舞ヘシトモ覺ス。アシクヤトテ打笑

其後高聲ニ念佛京師杉原本云。數十遍。西ニ向ヒ云云。相唱テ。頭

ヲ延テ任ス。殘四人モ如此。皆能ク見ヘシ。首共

取集テ内裏へ進ス。京師杉原本無首已下句。左衛門大夫信

忠是ヲ實檢シテ。事ノ由ヲ奏シケレハ。故院御

中陰ノ間也。鎌倉本云。又今日ヨリ三日ノ御物忌也。云云。獄門ニハ

懸ヘカラストテ。鎌倉本云。返シ遣サレケル間。云云。穀倉院ノ南

草深キ所ニワ捨ケル云云。

○半井本云。右衛門大夫信忠。右疑誤。本書及系圖竝作左。五人

ノ首ヲ實檢ス。十七日源平宗徒ノ者十三人首

ヲ斬キル十八日事ノ由ヲ申。故院御中陰ノ間也。獄

門ニ梟カクヘカラストテ。御使ヲ指副テ。穀倉院ノ

南裏ニ捨云云。按半井本前云。二十五日斬源平

自矛楯。且諸實錄說。詳出于上。可并見。



